大阪狭山市文化財報告書 1

山本一号窯(M. T. 252)
発掘調査概要報告書

1 9 8 8 . 3

大阪狭山市教育委員会

はしがき

大阪狭山市の西部に広がる陶器山丘陵は、古墳時代の須恵器生産地であり、陶邑古窯址群として周知の遺跡となっています。本書は昭和62年４月に新たに発見した山本一号窯の発掘調査報告書です。今回の調査では、多数の杯、甕等が出土し、古墳時代の狭山の歴史の一端をうかがうことができました。大阪狭山市は昭和62年10月に市制を施行し、文化財行政も新たな歩みを開始いたしました。今後は市内に点在する文化財の調査にも、本格的に取り組んでいきたいと考えています。今回の調査は大阪狭山市として初めての埋蔵文化財調査であり、以後の文化財行政の出発点となるものです。皆様方におかれましても、今後の本市文化財保護行政に対し、なお一層の御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年３月

大阪狭山市教育委員会

教育長　上　谷　三　郎

例　　言

1．本書は、大阪狭山市教育委員会（調査当時、狭山町教育委員会）が、狭山町都市排水路事業四つ池排水管新設工事に際して、大阪狭山市山本北（調査当時、南河内郡狭山町大野）で発見された須恵器窯、山本一号窯における発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査および遺物整理は、大阪狭山市教育委員会楓仁孝、市川秀之を担当者として実施した。

3．実測図中に表示した方位は磁北であり、標高はＯ・Ｐを用いた。

4．調査に際しては、塩崎建築興業の全面的な協力を得、また整理については孫麗霞、西康子、安富美子の各氏、写真撮影については阿南辰秀、中村仁紀両氏に協力いただいた。さらに大阪狭山市立狭山中学校の後藤正憲、米本由美子両先生、及び狭山中学校社会科クラブの皆さんには、遺物の注記、接合について熱心な協力を得た。本書は以上の方々の御協力なしには完成しえなかったものであり、ここに記して謝意を表したい。

　また調査過程における指導、助言については、以下の方々の協力をいただいた。

尾谷雅彦（河内長野市教育委員会）、小林義孝（泉北考古資料館）、豊田兼典（大阪府立科学教育センター）、西口陽一（泉北考古資料館）

5．遺跡の名称については「陶器山支群252号」が正式のものであるが、本書では市民の方々の理解を得やすいよう「山本一号窯」という名称を使うこととした。

目　　次

はしがき　　大阪狭山市教育委員会教育長　上谷三郎
例　言

1．発掘調査に至る経過 …… 1
2．位置と環境 …… 1
3．遺　　構 …… 1
4．遺　　物 …… 5
5．まとめ …… 6

挿　　図

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　遺構実測図 …… 3
第3図　山本一号窯出土土器実測図 …… 7
第4図　山本一号窯出土土器実測図 …… 8
第5図　山本一号窯出土土器実測図 …… 9
第6図　山本一号窯出土土器拓影 …… 10
第7図　山本一号窯出土土器拓影 …… 11

表

表1　ヘラ記号 …… 4
表2　遺物観察表 …… 12

図　　版

図版第1 a 遺構断面 …… 22
　　b 遺物出土状況 …… 22
図版第2　遺物（杯蓋） …… 23
図版第3　遺物（杯蓋、杯身） …… 24
図版第4　遺物（杯身、器台） …… 25
図版第5 a 遺物（甕） …… 26
　　b 遺物（瓶、高杯） …… 26

1．発掘調査に至る経過

大阪狭山市ではより良い住環境を実現するため、下水道網の設置を各所で進めているが、本遺跡はその過程において発見したもので、諸状況を考慮し、下水道工事を一時ストップして、調査に万全を尽すこととした。発掘の結果、須恵器窯は下水道の予定範囲を横切る形で存在し、今回は下水道工事範囲内の発掘となった。発掘調査は昭和62年４月20日より、同25日まで行い、また遺物整理は昭和62年４月26日より、12月28日まで行った。

2．位置と環境

堺市南部を中心とする陶邑古窯址群は、我が国最大の須恵器生産地であり、泉北ニュータウンの建設に伴い、昭和40年代より大阪府教育委員会によって調査が行われ、報告書も次々に刊行されてきている。大阪狭山市域の西部丘陵地域も、この陶邑古窯址群に含まれ、昭和42年に刊行された『狭山町史』の段階では48ヶ所、また豊田兼典氏の御指導のもと、近年、大阪府立狭山高校地歴部が行った[①]調査では72ヶ所の須恵器窯址が市域で確認されている。大阪狭山市教育委員会では、これらを埋蔵文化財分布図に記載し、その保護保存を図っている。しかしながら、大阪狭山市内においては、森浩一氏等によって西山窯址、48号窯址が発掘された他は、学問的な調査はなされておらず、このことは陶邑古窯址群全体の構成を[②]考える上でも大きな障害となってきた。

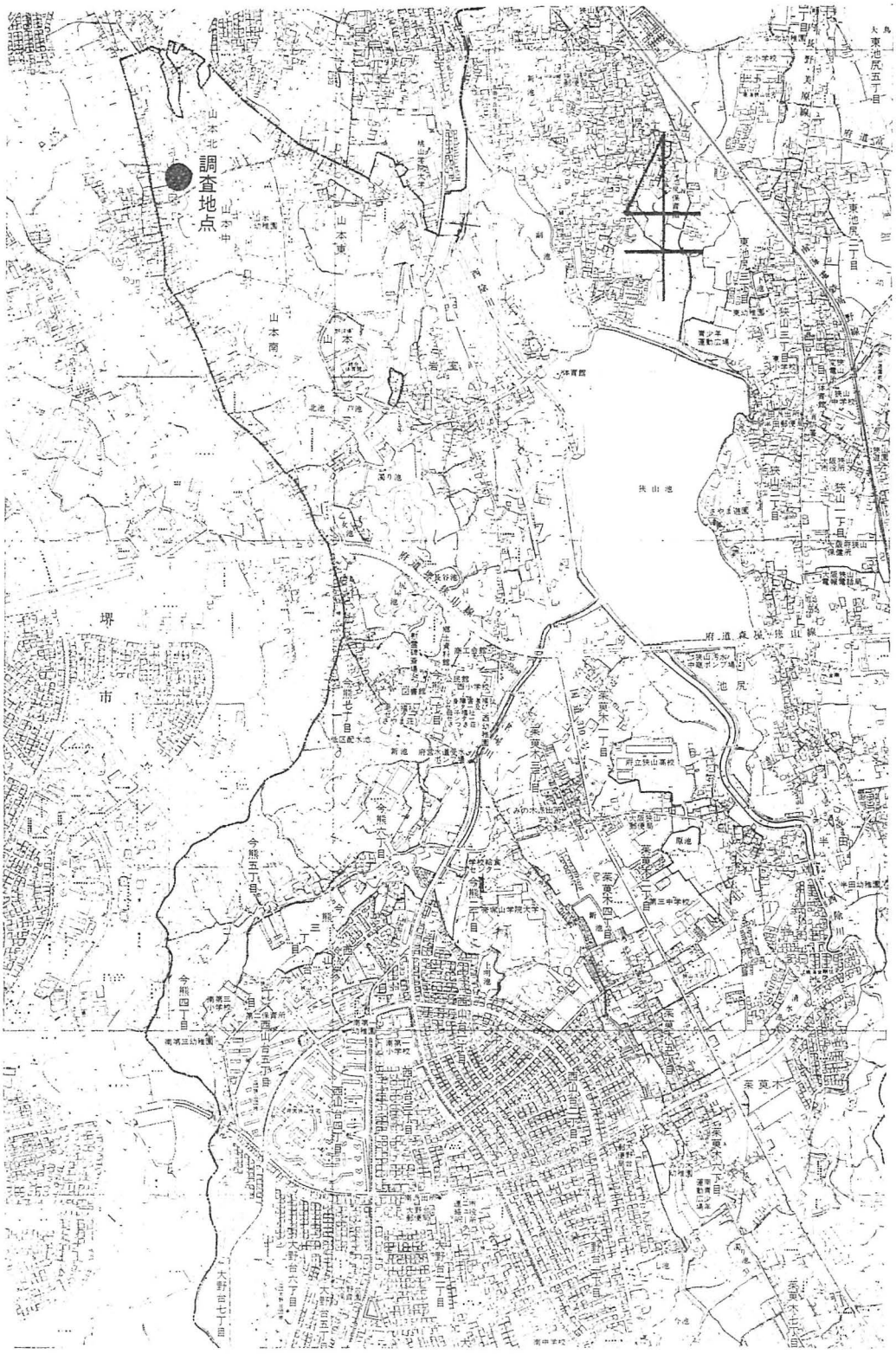
今回発掘された須恵器窯は、これまでの分布調査によっても確認されておらず、まったく新発見の窯址であった。現地は大阪狭山市の東北隅に位置し、堺市との境界に近く、陶器山丘陵の尾根線より約100ｍ東方に位置する。附近には四つ池、小野ヶ池等の池が存在し、いずれも陶器山丘陵の尾根にほぼ並行して走る谷をせき止めて造ったものである。今回調査した窯跡はこの谷の西側の傾斜を利用して造られた登り窯であり、近年まで窯の下方にも池が存在したが、昭和40年代に産業廃棄物の処理のため、池もろとも谷が埋め立てられ、窯跡は地表からはまったく確認しえない状態となった。またこの埋め立てに際して、窯の一部が削平を受けたことが今回の調査で確認された。

なお、名称については、遺跡発見当初は、新発見の窯跡であるために、仮に山本一号窯と呼称していたが、調査後、大阪府教育委員会、堺市教育委員会と協議の結果、陶器山支群252号窯（M.T.252）と命名することになった。

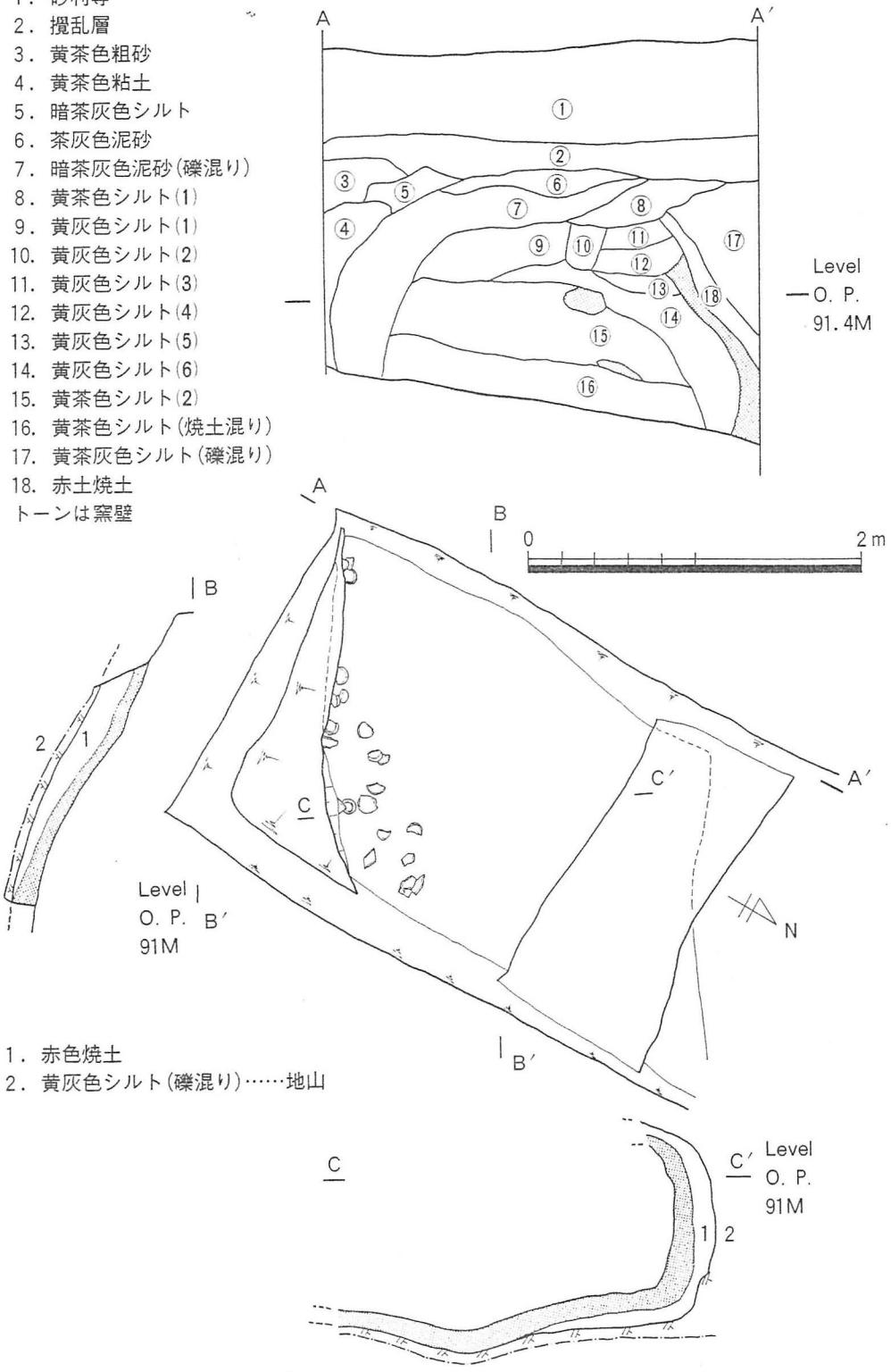
①、②『狭山町史』第１巻　狭山町史編纂委員会　　昭和42年

3．遺　構

今回の調査は、下水道工事に伴う発掘調査であったため、調査範囲は南北３ｍ、東西２ｍにとどまった。現場はかっての谷に沿った斜面であり、廃棄物処理のため埋めたてられ、O.P. 93ｍ前後の平担な地形を呈している。掘削の結果、地表面より50cm下までは、さまざまな廃棄物が埋っており、その下に攪乱層が存在する。さらにその下に窯跡遺構が存在していたのであるが、下水道が南北軸に沿って設置されるのに対し、窯は南西方向に軸を持ち、ちょうど下水道


調査地点
山本北
山本東
山本南
堺
市
狭山池
狭山
狭山三丁目
狭山一丁目
狭山二丁目
東池尻五丁目
東池尻二丁目
東池尻
今熊七丁目
今熊六丁目
今熊五丁目
今熊四丁目
今熊三丁目
今熊二丁目
今熊一丁目
茱萸木一丁目
茱萸木二丁目
茱萸木四丁目
茱萸木
半田
除川
大野台六丁目
大野台七丁目
大野台五丁目
大野台三丁目
大野台二丁目
大野台一丁目
西山台五丁目
西山台四丁目
西山台三丁目
西山台二丁目
西山台一丁目
府立狭山高校
府道森堺線
府道狭山線
南第三幼稚園
南第小学校
南第中学校
第三中学校
第二体育所
第一体育所
青少年運動広場
狭山中学校
狭山郵便局
狭山簡易郵便局
狭山電電公社
狭山ポンプ場
狭山汚水処理施設
狭山下水処理場
狭山ポンプ場
狭山ポンプ場
狭山ポンプ

1．砂利等
2．攪乱層
3．黄茶色粗砂
4．黄茶色粘土
5．暗茶灰色シルト
6．茶灰色泥砂
7．暗茶灰色泥砂(礫混り)
8．黄茶色シルト(1)
9．黄灰色シルト(1)
10．黄灰色シルト(2)
11．黄灰色シルト(3)
12．黄灰色シルト(4)
13．黄灰色シルト(5)
14．黄灰色シルト(6)
15．黄茶色シルト(2)
16．黄茶色シルト(焼土混り)
17．黄茶灰色シルト(礫混り)
18．赤土焼土
トーンは窯壁



1．赤色焼土
2．黄灰色シルト(礫混り)……地山

MT252平面図、断面図、土層堆積図(S＝1/40)

第2図　遺構実測図

によって横切られる形となった。窯全体の発掘ができなかったため、窯の全貌をうかがうことはできないのが残念であるが、今回の調査地点は窯の焼成部にあたると思われる。

窯体の一部は産業廃棄物処理に際して削平されていると思われるものの、窯体は比較的良好な形で検出することができた。天井部はすでに落ちていたが、窯壁は北側が130㎝、南側が60㎝の高さで残っていたことから、もとの地山を約120㎝の深さで斜面に平行に掘削し窯を築いたものと考えられる。また底面は最大幅220㎝で、平均傾斜角度22度を計る。また窯体の断ち割りを実施した結果、窯壁は一枚であることが確認された。

窯内からは次項に述べるように多数の土器が出土したが、その土器は窯底に置かれた状態のまま出土したものと、窯の天井部が落ちた時、ないしはそれ以降の土砂の流入により、窯上部より流されたものに分類できる。窯底より出土した土器は、窯の両端に列をなして並んでおり、中央部にはもともと土器が置かれなかったのか、ないしは土砂とともに下部へ流された可能性がある。

	A	B	C
	—	×	⋇
杯 蓋	4	0	1
杯 身	2	2	0

表1、杯ヘラ記号分類

4．遺　　物

今回の調査で出土した遺物はすべて須恵器であり、数量はコンテナ４箱を数える。須恵器の器種は、大半が杯蓋、杯身、甕で占められるが、甕は破片での出土がほとんどで、復元には至らなかった。これらの他に器台、高杯、瓶が出土している。以下、順に考察を加えたい。

a．杯　蓋

杯蓋は約60点出土し、そのうち38点を実測した。実測した遺物は口径直径によって３つに分類できる。

- 口径が13cm以下のもの（１～３）

  非常に形がいびつな３を除くと、１、２は形態に相似点が見られる。ともに口縁がほぼ直立し、天井部は低く平らである。２、３にはヘラ記号が見られる。

- 口径が14cm以下のもの（４～25）

  出土した杯蓋の中で主流を占めるタイプであるが、口縁がやや外反し天井部も丸みを帯びるタイプと、口縁部が直立し天井部が低く平たいタイプに分類できる。ただしこの２タイプの区分は不明確であり連続的な変化を示すものと考えられる。15、17にヘラ記号が認められる。

- 口径が14cmを上まわるもの（28～38）

  全体的に口縁部が直立し、天井部は低く平らかで、稜が形骸化したものが多く見られる。このうち31、32、33などのように天井部がやや丸みを帯びるものに関しては稜は比較的高く鋭い。33にヘラ記号が見られる。

杯身に施されたヘラ記号は、表１の通りであり、うちＡが圧倒的に多い。

b．杯　　身

杯身は約50点出土し、そのうち24点を実測した。杯身に関しても口径直径を基準として３つのタイプを設定した。

- 口径が12cm以下のもの（39～48）

  例外なく立ち上り部は内傾する。39～41のように底部が丸味を帯びるもの以外は、底部は平たく浅い。44は非常に立ち上り部が高く底部が浅いという点で、他とは異った形態を有する。

- 口径が13cm以下のもの（49～57）

  このタイプのものには底部が丸みを持ち、やや深いものが多く見られる。

- 口径が13cmを上まわるもの。

  58は底部が深く丸みを帯び他とはまったく異った形態を示す。他はすべて底部が浅く平たいタイプである。このタイプは口縁内面の段が省略されている点でも相似点を持つ。

C．器　　台

１点出土。比較的大型の器台である。外面は波状紋、沈線、格子状叩きによって飾られ、内面には同心円叩き、平行叩きが施される。脚部はほとんど残らないが、３ヶ所にすかし窓が存在する。また脚部にも波状紋が入る。

d．瓶

1点が出土。口縁部のみが残存している。口縁部は上半分が大きく外側に開き、それより下には波状紋が入る。

e．高　杯

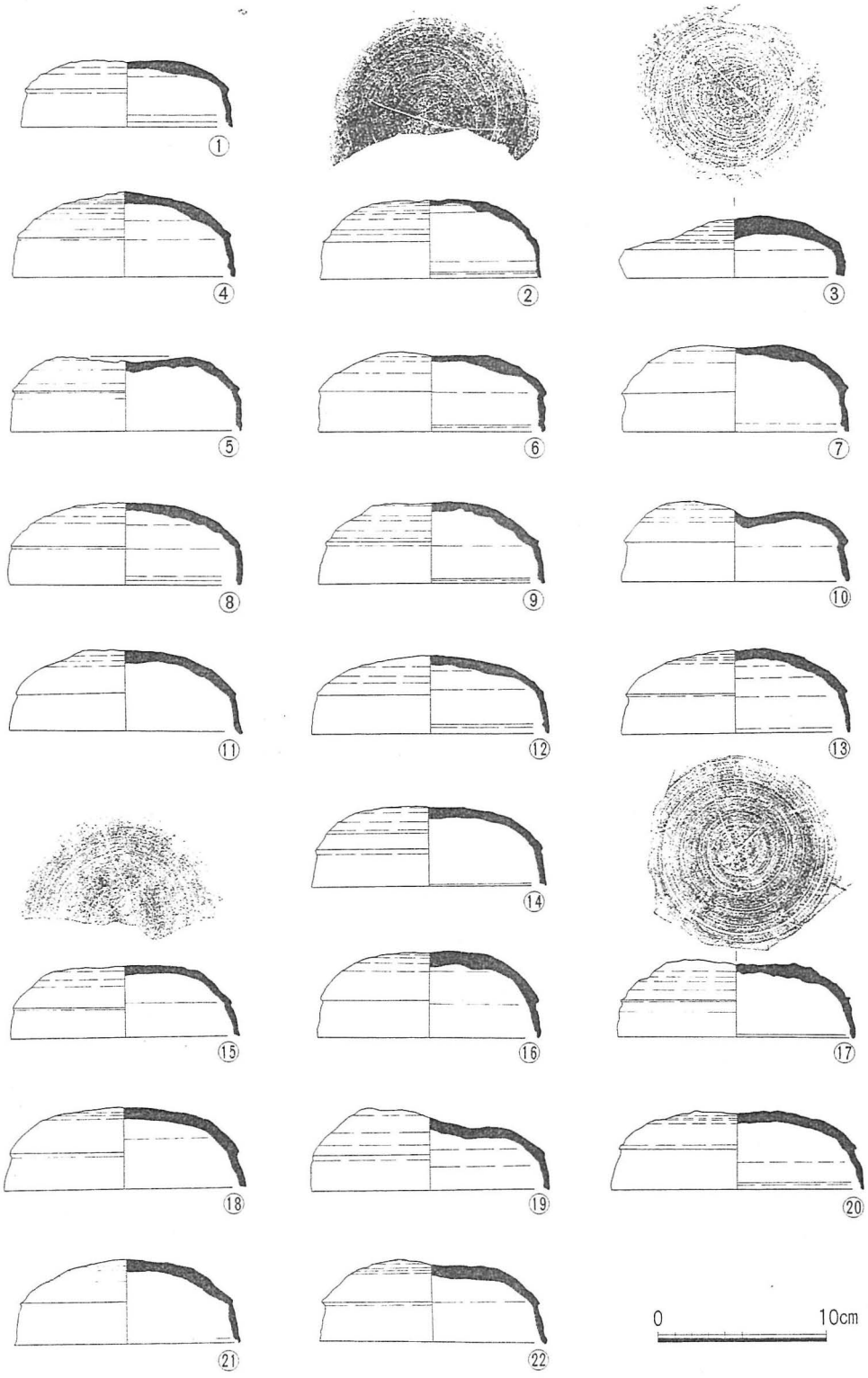
2点が出土。いづれも脚部のみが残存する。ともに4ヶ所のすかし窓が存在する。

f．甕

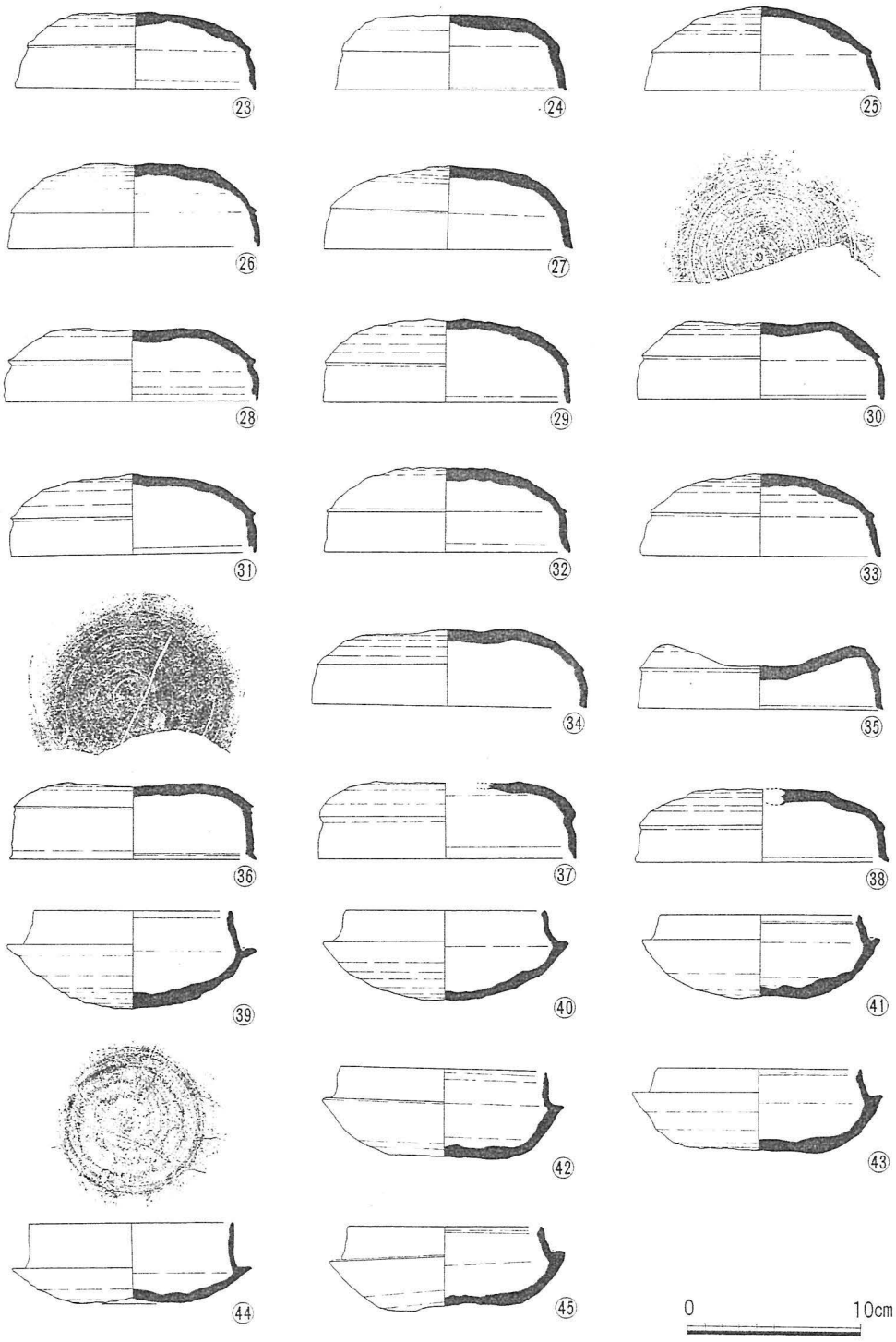
大量の甕破片が出土したが、接合しえたものは少なく実測ができたのは67の口縁部のみであった。図6、7には代表的な破片の内外面の拓影を載せた。外面は平行叩きによる調整がほとんどで、まれに5、6のように平行叩きを施した後、回転カキ目調整をなすものがある。格子状叩きはほとんど見られない。内面には同心円叩きが入るが、すり消しを施すものは見られない。全体的に内面の同心円叩きの種類が限られるのに対し、外面の平行叩きはより多くの種類があるようであるが、両者の関連を確かめることはできなかった。

5．まとめ

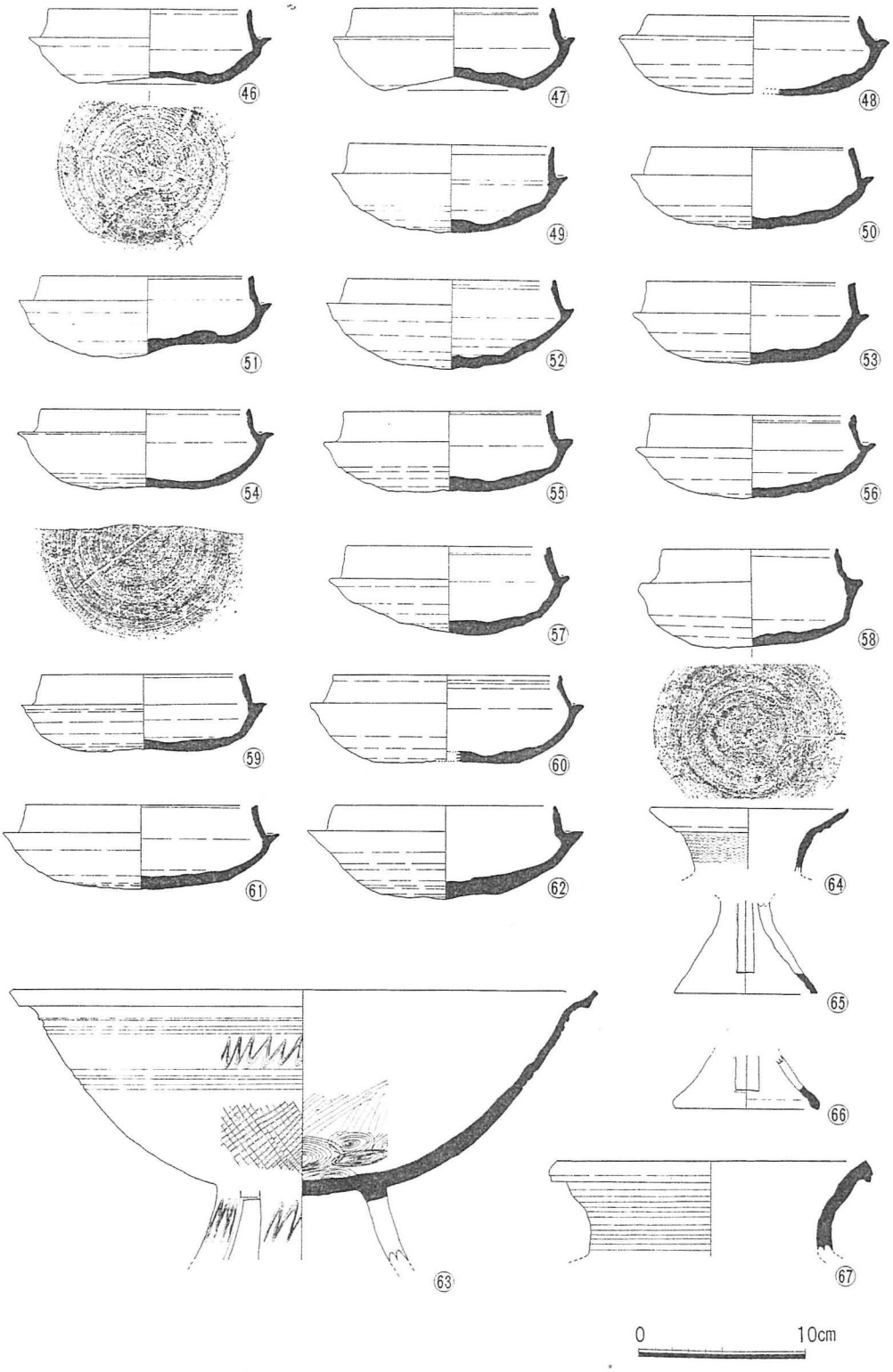
今回の発掘調査は山本一号窯の一部のみにとどまったが、古代の狭山の歴史の一端をうかがうに十分な成果を挙げることができた。出土した土器は、中村浩氏の編年によれば2－Ⅰから2－Ⅱにかけてのものであり、時代としては6世紀初頭から中葉にかけてのものと考えられる。山本一号窯は、これまで数多くの研究がなされてきた陶邑古窯址群の一部を構成するものと考えられ、今日の大阪狭山市域が古代における代表的な須恵器生産地であったことが具体的な形で明確になった。今後は市内の他の窯の調査もあわせ進め、狭山の古代史の解明に努めていかねばならない。



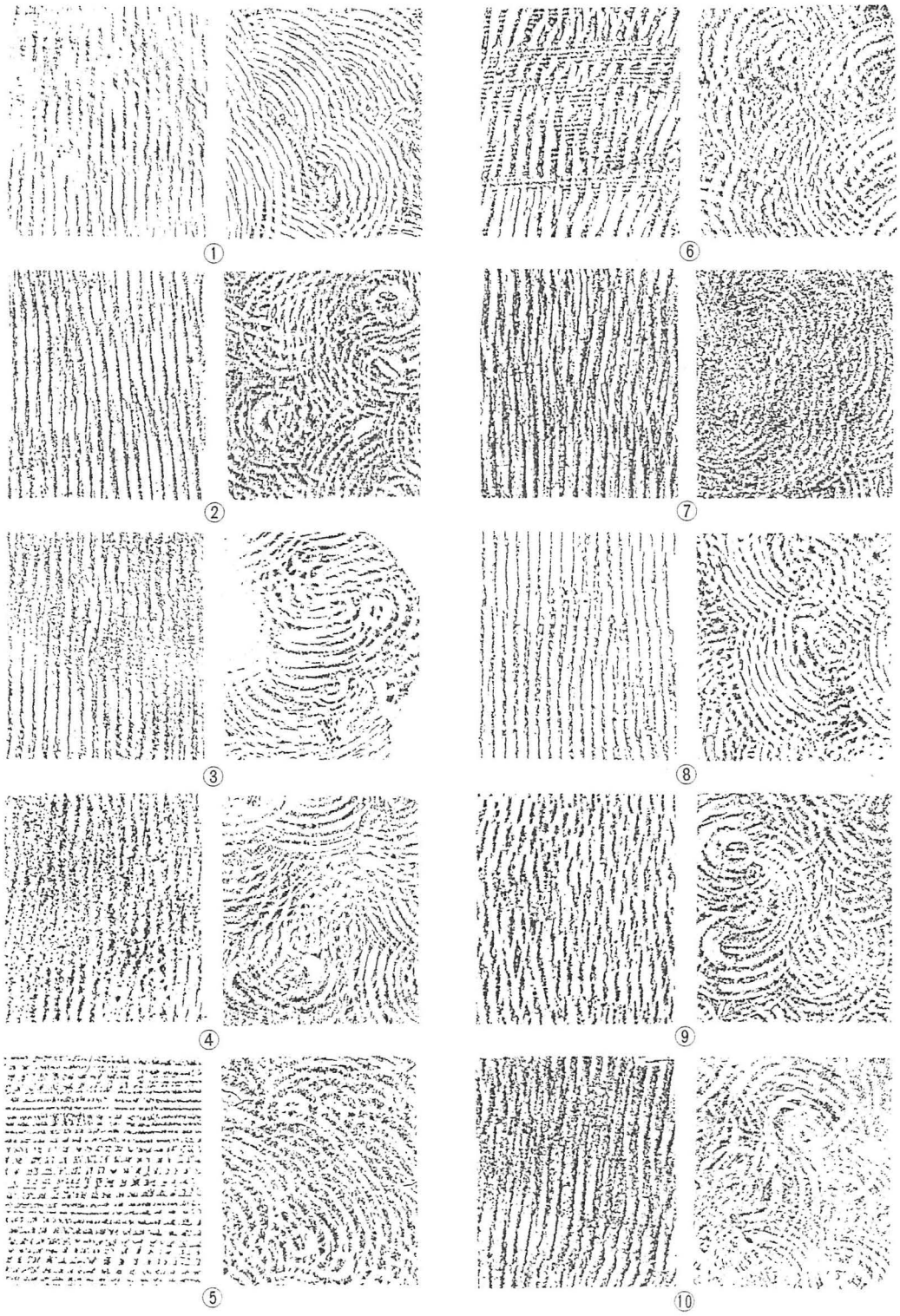
第３図　ＭＴ252出土遺物　杯蓋(①～㉒)



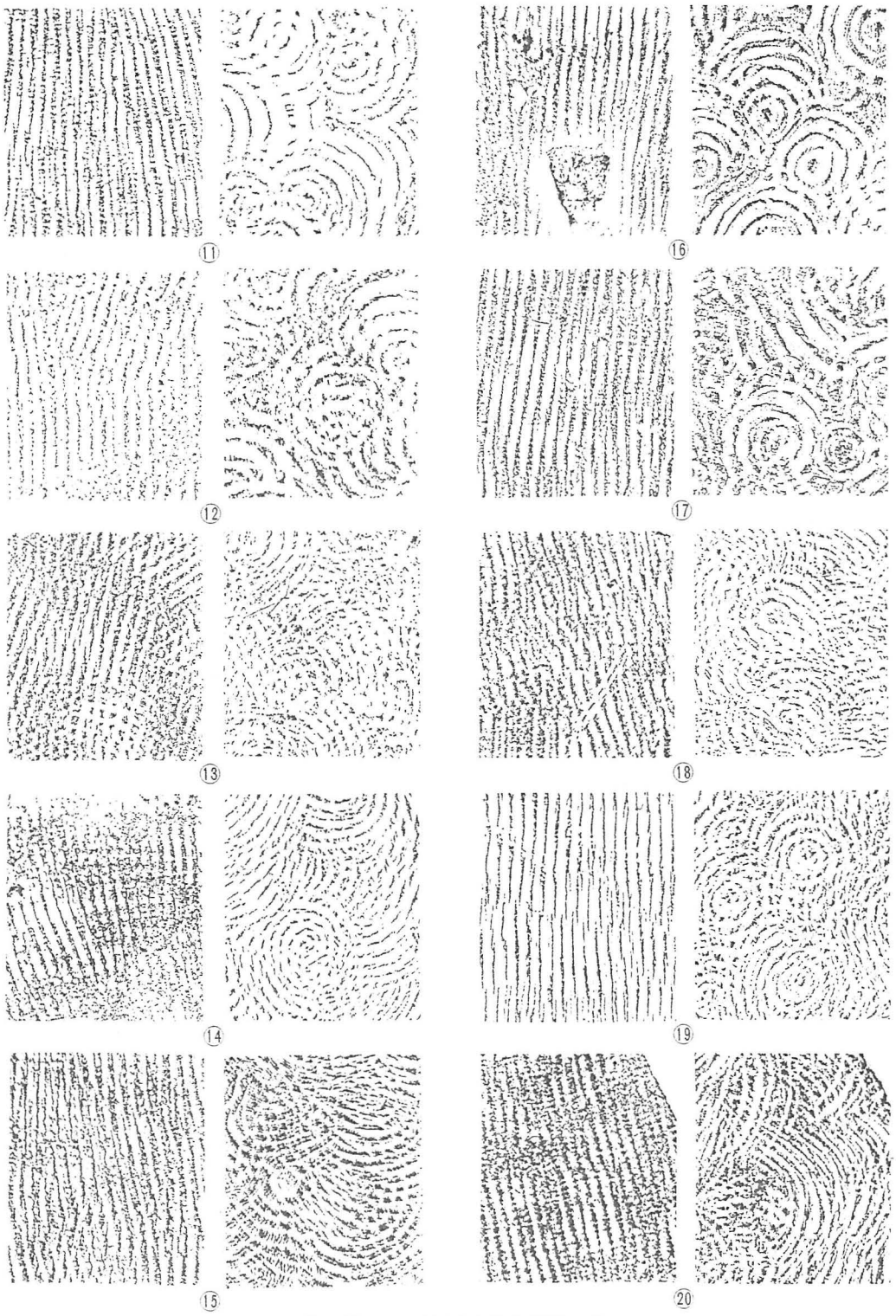
第４図　ＭＴ252出土遺物　杯蓋(㉓～㊳)　杯身(㊴～㊺)



第５図　ＭＴ252出土遺物　杯身(46～62) 器台63　瓶64　高杯脚部65、66　甕67



第６図　ＭＴ252出土遺物拓影　甕



第７図　ＭＴ252出土遺物拓影　甕

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	1	口径 12.4cm 稜径 11.9cm 器高 3.9cm 稜高 2.2cm	口縁はやや開き気味に下る。端部は丸く内面には小さな段がある。稜は高く比較的鋭い。天井部は低く平らである。	天井部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左回り。他は回転ナデ調整。	色調 灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	2	口径 13cm 稜経 12.7cm 器高 4.5cm 稜高 1.5cm	口縁部はほぼ垂直に立つ。端部は丸く、内面に明瞭な段を持つ。稜は小さいが鋭い。天井部は低く平らである。½が残存。(ヘラ記号)	天井部⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	3	口径 13cm 稜経 13cm 器高 3.4cm 稜高 1.8cm	形が非常にいびつである。口縁は非常に太くほぼ垂直に下る。端部はやや内傾する段となる。稜はほとんど認められない。天井部は極端に低く平らである。(ヘラ記号)	天井部は上から⅔が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 外 暗灰色 内 淡灰色 焼成 不良 胎土 密
杯蓋	4	口径 13.2cm 稜径 12.6cm 器高 5.05cm 稜高 2.3cm	口縁はやや開いてからほぼ垂直に下る。端部はやや尖るが内面の段はほとんど認められない。天井部はやや丸みを持つ。9割が残存。	天井部は8割までが回転ヘラケズリ。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	5	口径 13.6cm 稜経 13.4cm 器高 4.4cm 稜高 2.2cm	口縁はほぼ垂直に下る。端部は丸く内面に明瞭な段を有す。稜は小さいが鋭い。天井部は低く丸い。	天井部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 やや粗
杯蓋	6	口径 13.4cm 稜経 13.9cm 器高 4.7cm 稜高 2.4cm	口縁はほぼ垂直に下る。端部は丸く内面に明瞭な段を持つ。天井部は低く平らである。完形。	天井部は9割まで回転ヘラケズリ。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 やや粗。 ところどころに1㎜前後の白い砂粒を含む。
杯蓋	7	口径 13.4cm 稜経 13.5cm 器高 5.05cm 稜高 2.2cm	口縁は一度内湾してからほぼ垂直に下る。端部内面には段を持つ。稜は比較的高く鋭い。天井部は低く平らである。	天井部の上部¾が回転ヘラ削り。ロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 一部不良 軟質 胎土 密。所々に1～2㎜の白い砂粒をふくむ。

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	8	口径 13.6cm 稜径 13.5cm 器高 4.8cm 稜高 2.2cm	口縁部は直立気味に下りやや内側に入る。端部は四角く内面に段を持つ。稜は比較的高くにぶい。天井部は低く平らである。½が残存。	天井部上から⅔が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向不明。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 やや粗 5㎜以下の砂粒を多く含む。
杯蓋	9	口径 13.6cm 稜径 12.5cm 器高 4.8cm 稜高 2.4cm	口縁はやや開き気味に下る。端部は丸く内面に明瞭な段を有する。稜は低いが鋭い。天井部は高く丸い。8割残存。	天井部は上から½まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右。他は回転ナデ調整。	色調 暗茶灰色 焼成 不良 胎土 密
杯蓋	10	口径 13.8cm 稜径 12.9cm 器高 4.4cm 稜高 2.4cm	口縁は開き気味に下る。端部は丸く内面に面をもつ。稜は小さくにぶい。天井部はやや高く丸みをもつ。	天井部は上より⅔が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向不明。	色調 灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	11	口径 13.8cm 稜径 12.9cm 器高 5.2cm 稜高 2.4cm	口径は外反しながら下る。端部は断面三角形で内面に小さな段を持つ。稜は天井とは連続するが、口縁部に対しては段差をもつ。9割残存。	天井部は上より⅔が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 灰色 焼成 やや不良 胎土 密
杯蓋	12	口径 14cm 稜径 13.4cm 器高 5.6cm 稜高 2.3cm	口縁部はやや開き気味に下る。端部は丸く、内面に突帯がまわる。稜は低くにぶい。天井部は低く平らである。	天井部は上より⅚まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	13	口径 13.6cm 稜径 13.2cm 器高 4.9cm 稜高 2.3cm	口縁部はややいびつ。口縁はやや開き気味に下る。端部は丸く内面の段はほとんど見えない。稜は鋭い。天井部はやや丸い。	天井部は上より½まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密。所々に1㎜前後の砂粒を含む。
杯蓋	14	口径 13.8cm 稜径 13.85cm 器高 4.6cm 稜高 2.2cm	口縁部はやや開き気味に下る。端部は尖り内面に内傾する面を持つ。稜は小さくにぶい。天井部はやや高く丸い。9割残存。	天井部は上から⅚まで回転ロクロ調整。ロクロ回転方向は右まわり他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密。所々に1㎜前後の砂粒を含む。

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	15	口径 13.5cm 稜径 12.9cm 器高 4.4cm 稜高 1.8cm	口縁はやや開き気味に下る。端部は内傾する段を持つ。稜は形骸化してほとんど認められない。天井部は低く平らである。(ヘラ記号)	天井部は上より⅔が回転ヘラ削り。回転方向不明。他は回転ナデ調整。	色調 淡茶灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	16	口径 13.3cm 稜径 12.9cm 器高 5.1cm 稜高 2.3cm	口縁はやや外反ぎみ。端部は丸く内面に段を持つ。稜は天井部とほぼ連続するが、口縁部に対しては明瞭な段差を示す。天井部は高く丸い。9割残存。	天井部上方より8割が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 外面黒灰色 内面暗茶灰色 焼成 不良 胎土 やや粗。
杯蓋	17	口径 14cm 稜径 13.6cm 器高 4.6cm 稜高 2.2cm	口縁はやや広き気味に下る。端部は丸く内面に段を持つ。稜は小さいが鋭い。天井部は低く平ら。(ヘラ記号)	天井部は上より⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密。ところどころに2㎜ほどの白い砂粒を含む。
杯蓋	18	口径 13.3cm 稜径 13.35cm 器高 5cm 稜高 2.2cm	口縁はやや開き気味に下る。端部は内傾する面を持つ。稜は小さくにぶい天井部は低く丸い。	天井部上から½は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 内一淡灰色 外一暗灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	19	口径 14cm 稜径 13.6cm 器高 4.8cm 稜高 2.1cm	天井部が大きくひずむ。口縁部はほぼ垂直に下る。端部は尖り、内面に面を持つ。稜は低い。天井部は低い。	天井部は上から⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 一部暗茶灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	20	口径 15cm 稜径 14.1cm 器高 4.6cm 稜高 2.35cm	口縁部は開き気味に下る。端部は丸く内面に段を持つ。稜は低いが鋭い。天井部は平たい。½が残存。	天井部は上から⅚まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向不明。	色調 淡灰色 焼成 不良 胎土 やや粗。 0.5㎜程度の白い砂粒を所々に含む。
杯蓋	21	口径 13.3cm 稜径 12.6cm 器高 4.9cm 稜高 2.4cm	天井部がひずむ。口縁部はやや開き気味に下る。端部は丸く内面に段を持つ。稜は小さい。天井部は低くやや丸い。	天井部は上より⅚まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	22	口径 13.4cm 稜径 12.9cm 器高 4.7cm 稜高 2.2cm	全体的にややいびつ。口縁部はやや開き気味。端部は丸く内面に段を持つ。稜は鋭い。天井部は低く平ら。9割残存。	ロクロ回転方向は右まわり。天井部上から½が回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。	色調 灰色 焼成 不良 胎土 粗。
杯蓋	23	口径 13.8cm 稜径 12.9cm 器高 4.7cm 稜高 1.8cm	口縁部がいびつ。口縁は外に開く。端部はとがり内面にかすかな面を持つ。稜は小さくにぶい。天井部は低く平ら。完形。	天井部は上から8割まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向不明。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密。
杯蓋	24	口径 13.4cm 稜径 12.55cm 器高 4.3cm 稜高 2.2cm	口縁部はやや外反ぎみに下る。端部は内傾する面をなす。稜は非常ににぶく口縁部に対して段が認められるのみ。½が残存。	天井部¾が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は不明。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 不良 胎土 密
杯蓋	25	口径 13.6cm 稜径 12.6cm 器高 4.8cm 稜高 2.1cm	口縁はやや開き気味に下り、端部は内傾して段を持つ。稜は比較的明瞭。天井部は高く丸みを持つ。9割が残存。	天井部の上部¾が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	26	口径 14.4cm 稜径 14.0cm 器高 4.8cm 稜高 2.0cm	口縁はやや開き気味に下る。端部はやや尖り、内面に段を持つ。稜は丸い。天井部は高く丸い。9割が残存。	天井部は上より½が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	27	口径 14.3cm 稜径 13.5cm 器高 5.0cm 稜高 2.4cm	口縁はやや開いてから垂直に下る。端部は内傾する面を持つ。稜は小さい。9割が残存。	天井部上より¾が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 やや粗。1㎜前後の砂粒を含む。
杯蓋	28	口径 14.4cm 稜径 14.1cm 器高 4.1cm 稜高 2.2cm	口縁はやや外に開き、中ほどより下は内に閉じ気味に下る。端部は尖り内面に明瞭な段を持つ。稜は高いが丸い。天井部は低く平ら。	天井部は上より⅔が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	29	口径 14.2cm 稜径 14.0cm 器高 4.8cm 稜高 2.3cm	口縁はほぼ直立する。端部は丸く内面に不明瞭な段を持つ。稜は比較的大きい。天井部は低く平たい。	天井部は上から⅗まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 やや不良 胎土 密
杯蓋	30	口径 14.2cm 稜径 13.8cm 器高 4.4cm 稜高 2.4cm	口縁はほぼ垂直に下る。端部は丸く内面に段を持つ。稜は小さいが鋭くその下につめ跡がはっきりと残る。天井部は低く平たい。	天井部は⅘まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。 (ヘラ記号)	色調 外一暗灰色 内一淡灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	31	口径 14.2cm 稜径 14.1cm 器高 4.4cm 稜高 2.1cm	口縁はほぼ垂直に下る。端部はとがり内面に明瞭な段を持つ。稜は高く鋭い。天井部は低く平ら。	天井部は⅗まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密。1～2㎜前後の砂粒を含む。
杯蓋	32	口径 14.2cm 稜径 13.8cm 器高 4.8cm 稜高 2.3cm	口縁は尖り、内面に面を持つ。稜はやや開き気味に下り、小さいが鋭い。天井部は低いが丸みを帯びる。½が残存。	天井部上から½は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密。1㎜程度の白い砂粒を少量含む。
杯蓋	33	口径 14.4cm 稜径 14.0cm 器高 4.75cm 稜高 2.0cm	口縁はやや開き気味に下り、端部は丸い。口縁内部には明瞭な段を有す。稜は丸く小さい。天井部は高く丸い。9割が残存。	天井部の上部¾が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密
杯蓋	34	口径 15.7cm 稜径 15.3cm 器高 4.4cm 稜高 2.4cm	口縁はやや外に広がってから垂直に下る。端部は尖り、内部に面を持つ。稜は小さい。天井部は低く平たい。	天井部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 やや粗。
杯蓋	35	口径 14.2cm 稜径 13.9cm 器高 3.7cm 稜高 4.3cm	天井部が大きくへこんでいる。口縁はやや開き気味に下る。端部はとがり内傾する端をもつ。稜は低いが鋭い。天井部は原型不明。	天井部は½まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	36	口径 14.2cm 稜径 13.7cm 器高 4.15cm 稜高 2.8cm	口縁は長くほぼ垂直に下る。口縁端部はやや開き内面に明瞭な段を持つ。天井部は低く平ら。	天井部上から½が回転ヘラ削り。ロクロ回転。方向は右。(ヘラ記号)	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 やや粗。2～3㎜の砂粒を少量含む。
杯蓋	38	口径 14.6cm 稜径 14.1cm 器高 4.2cm 稜高 2.1cm	口縁は少し開いてから垂直におちる。端部内面の段はあいまいで、内傾する面に近い稜は丸くにぶい。天井部は平ら。½が残存。	天井部の上部¾が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 割れてから更に焼かれており、色の異なる破片が接合、一方は暗灰色。もう一方は淡灰色。 焼成 良好 胎土 密。0.5㎜程度の白砂粒を含む。
杯蓋	39	口径 14.8cm 稜径 14.6cm 器高 4.4cm 稜高 2.4cm	口縁部はほぼ直立する。端部は四角く、内面に面を持つ。端は丸く大きくふくれる。天井部は低く平たい。⅓が残存。	天井部は⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向不明。	色調 淡灰色 焼成 不良 胎土 密
杯身	39	口径 11.4cm 受け径14.3cm 器高 5.6cm 立ち上り高 1.9cm	口縁はやや内傾する。端部は四角く内面に小さな段を持つ。受けはだ円形。断面でやや上方に向って伸びる。天井部は低く丸い。完形。	天井部⅚が回転ヘラ削り。ロクロ回転は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 赤灰色 焼成 不良 胎土 密
杯身	40	口径 11.5cm 受け径14.0cm 器高 5.1cm 立ち上り高 1.8cm	口縁は内傾する。端部は丸く内面に段を持たない。稜は水平に伸び先端はやや尖る。底部は浅く丸味を帯びる。	底部は下より⅘まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右。他は回転ナデ調整。	色調 灰色 焼成 良好 胎土 密。
杯身	41	口径 11.4cm 受け径 13.75cm 器高 4.8cm 立ち上り高 1.4cm	口縁は短かく内傾する。端部はやや尖り、内面に小さな段を持つ。受けはやや上方に伸びる。底部は浅く平たい。完形。	底部は下より⅔が回転ヘラケズり。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密。0.5㎜前後の砂粒を多量に含む。
杯身	42	口径 11.6cm 受け径13.8cm 器高 5.0cm 立ち上り高 1.9cm	口縁はほぼ直立する。端部はとがり内面の段は、ほとんど形骸化し沈線が入るのみ。受けはほぼ水平にのびる。底部は平ら。	底部は下から⅜まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 不良 胎土 密。所々に2㎜前後の白い砂粒を含む

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	43	口径 11.7cm 受け径14.3cm 器高 4.7cm 立ち上り高 1.4cm	口縁は内傾する。端部はやや鋭く、内側に段を持つ。受けはやや丸みを持ち水平にのびる。底部は平たい。完形。	底部より⅔が回転ヘラ削り、ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 一部分暗赤灰色 焼成 不良 胎土 密
杯身	44	口径 11.8cm 受け径13.8cm 器高 4.6cm 立ち上り高 2.6cm	口縁部は長くほぼ直立。端部は丸く内面にはかすかな段が認められるのみ。受けは薄くほぼ水平にのびる。底部は浅く平ら。½が残存。	底部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 底部 黒灰色 その他灰色 焼成 やや不良 胎土 密
杯身	45	口径 11.1cm 受け径13.5cm 器高 4.85cm 立ち上り高 1.9cm	口縁はやや内傾する。端部は丸く内面に段を持つ。稜はやや丸くふくらみやや上方に伸びる。底部は浅く平たい。	底部は下より½まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密。所々に1mm前後の砂粒を含む。
杯身	46	口径 12.0cm 受け径14.4cm 器高 4.4cm 立ち上り高 1.7cm	口縁は内傾。端部は断面三角形で内面に不明瞭な段を有す。受けは薄くやや上方に伸びる⅔が残存。 (ヘラ記号)	上部より⅔が回転ヘラ削り。ロクロの回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 外 黒灰色 内 淡灰色 焼成 良好 胎土 密。
杯身	47	口径 11.8cm 受け径14.4cm 器高 4.9cm 立ち上り高 1.7cm	口縁は内傾する。端部は丸く内面に段を持つ。受けは丸くやや上方に伸びる。底部はへこむ。⅔が残存。	底部⅚が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密
杯身	48	口径 12.6cm 受け径16.2cm 器高 4.65cm 立ち上り高1.45cm	口縁は内傾する。端部は尖り内面に不明瞭な段を持つ。受けは大きく上方にふくらみ水平方向に伸びる。底部は低く平たい。⅓が残存。	底部は下より½まで回転ヘラケズリ。ロクロ回転方向不明。他は回転ナデ調整。	色調 暗緑灰色 焼成 良好 胎土 やや粗
杯身	49	口径12.1cm~11.5cm 受け径14.0cm 器高 5.2cm 立ち上り高 1.8cm	口縁はほぼ直立する。端部は丸く内側には沈線がはいる。受けはとがりやや上方を向く底部は浅く平たい。完形。	底部は下から8割まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右。他は回転ナデ調整。	色調 淡灰色 焼成 やや不良 胎土 やや粗。砂粒を多く含む。

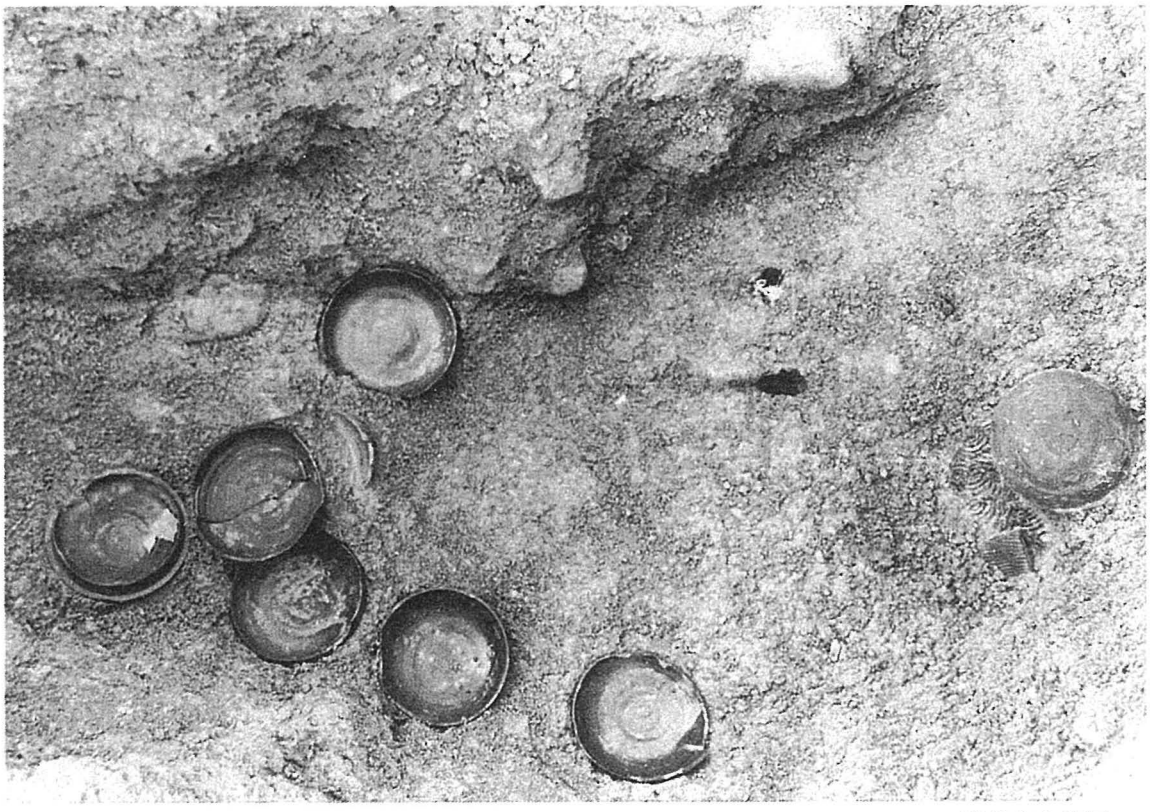
種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	50	口径 12.2cm 受け径14.6cm 器高 4.8cm 立ち上り高 1.7cm	口縁は短かくやや内傾する。端部は内傾して面を持つ。稜は水平に伸び端部が鋭くとがる。底部は浅く平らである。8割が残存。	底部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。上から½が回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。	色調 外面 黒灰色 内面 暗赤灰色 焼成 やや不良 胎土 やや粗。砂粒を多く含む。
杯身	51	口径 12.5cm 受け径15.2cm 器高 4.9cm 立ち上り高 1.5cm	口縁は短く内傾する。端部は内傾する面となる。受けは丸みを持ち、やや上方を向く。天井部は一部がひずむが浅く平たい。ほぼ完形。	天井部は回転ヘラ削りロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 やや粗
杯身	52	口径 12.6cm 受け径14.7cm 器高 5.4cm 立ち上り高 1.5cm	口縁部はやや内傾する。端部は丸く内面の段は形骸化しほとんど認められない。受けは断面三角形でほぼ水平に伸びる。9割残存。	底部下部より8割まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 やや粗。所々に0.5㎜前後の白い砂粒を含む。
杯身	53	口径 12.6cm 受け径14.2cm 器高 4.9cm 立ち上り高 1.9cm	口縁はやや内傾。端部は内面に段を持つが省略が著しくほとんど面に近い。稜は水平にのびる。底部は浅く平たい。	底部は底より½が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 灰色 焼成 やや不良 胎土 密
杯身	54	口径 12.4cm 受け径15.2cm 器高 4.8cm 立ち上り高 1.4cm	口縁はやや内傾する。端部はやや尖り、内面には段も面もない。受けは薄くやや上方に伸びる。底は浅く平ら。 (ヘラ記号)	底部は下より⅗まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密。2㎜前後の砂粒を所々に含む。
杯身	55	口径 12.8cm 受け径14.9cm 器高 4.7cm 立ち上り高 1.8cm	口縁は内傾する。端部は尖り内面に段を持つ。受けは水平にのびる。底面は浅く平たい	底部は底から⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 密
杯身	56	口径 12.3cm 受け径14.5cm 器高 5.0cm 立ち上り高 2.0cm	口縁はやや内傾してから直立する。口縁端部内面の段は形骸化し沈線を施すのみ。受けは薄くやや上り気味に伸びる。底部は比較的平らである。	底部下より⅔が回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。ロクロ回転方向は左まわり。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密

種類	挿図図版	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	57	口径 12.1cm 受け径14.3cm 器高 5.3cm 立ち上り高1.95cm	底部がややいびつ。口縁部はほぼ直立する。端部は丸く、内面に明瞭な段を持つ。完形	天井部の上部¾が回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 暗灰色 焼成 やや不良 胎土 粗。1㎜前後の砂粒が多く混じる。
杯身	58	口径 13.4cm 受け径13.5cm 器高 4.75cm 立ち上り高1.9cm	口縁は内傾する。端部は丸く内面に段を持つ。稜は丸く厚い。底部は深く丸い。 (ヘラ記号)	底面は下から⅔まで回転ヘラ削り。回転方向は右まわり。	色調 黒灰色 焼成 良好 胎土 密
杯身	59	口径 13.2cm 受け径14.5cm 器高 4.6cm 立ち上り高1.8cm	底部が大きくへこんでいる。口縁部はやや内傾。端部は尖り、内傾する面を持つ。受けは端部がとがる。底部は深く平たい。	底部は下から⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。	色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 やや粗。2～3㎜程度の砂粒を含む。
杯身	60	口径 13.4cm 受け経16.2cm 器高 5.3cm 立ち上り高1.7cm	口縁は内傾する。端部は丸く内面に段を持つ。稜は断面三角形でほぼ水平に伸びる。底部は浅く平たい。	底部は⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 内面一暗赤灰色 外面一暗灰色 焼成 良好 胎土 密
杯身	61	口径 13.8cm 受け径16.4cm 器高 4.0cm 立ち上り高1.7cm	口縁はやや内傾する。端部は内傾する段をなす。受けは断面三角形でほぼ水平に伸びる底部は浅く平たい。	底部下より⅔まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は左まわり。他は回転ナデ調整。	色調 内面一暗灰色 外面一淡灰色 焼成 不良 胎土 粗。所々に1㎜前後の砂粒を含む。
杯身	62	口径 13.1cm 受け径16.4cm 器高 5.6cm 立ち上り高1.5cm	口縁は内傾する。端部は内傾し内面には沈線が入るのみ。稜は断面三角形でやや上方に伸びる。底部は浅く平たい。ほぼ完形。	底部は下より8割まで回転ヘラ削り。ロクロ回転方向は右まわり。他は回転ナデ調整。	色調 淡灰色 焼成 不良 胎土 粗

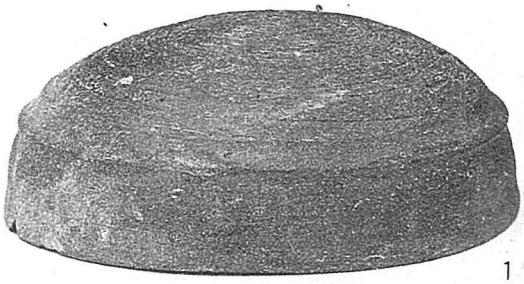
図　　版

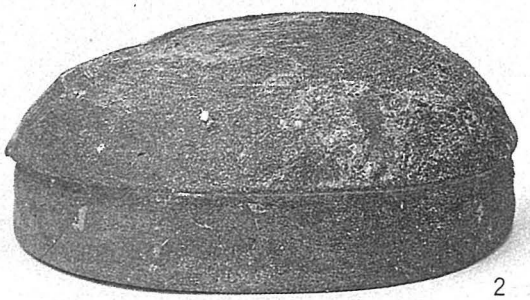
図版1

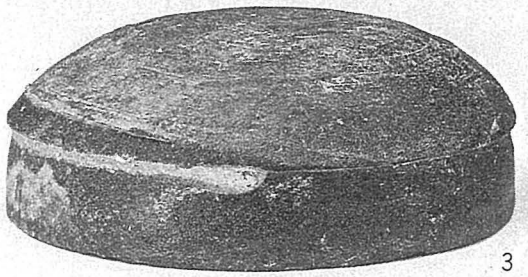
a．遺構断面

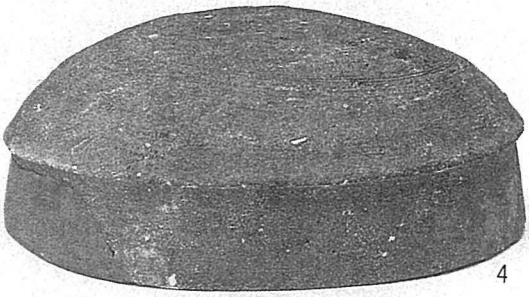


b．遺物出土状況

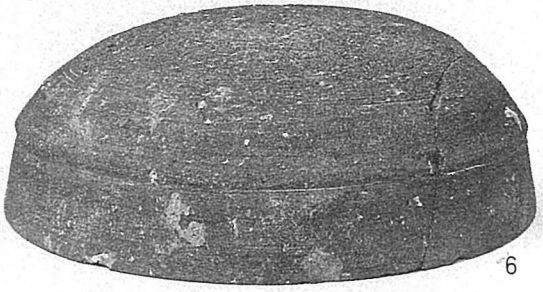

1


2

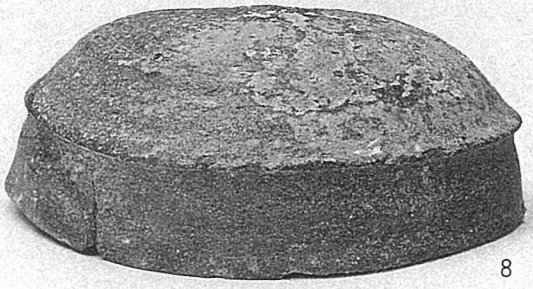

3

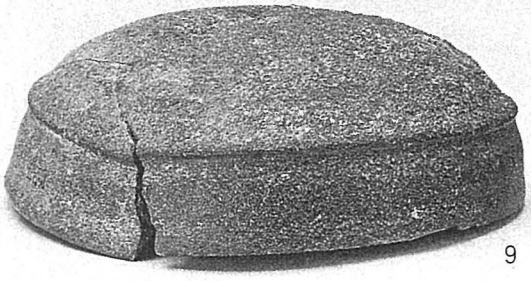

4

5


6

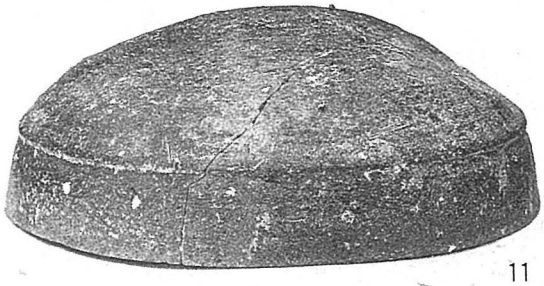
7

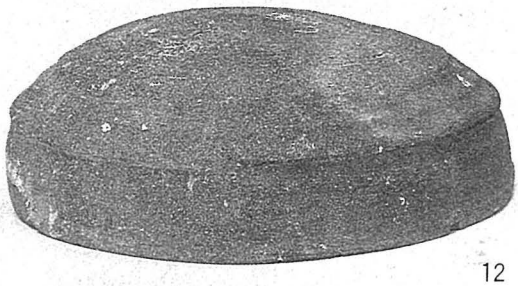

8


9

10

杯蓋（1～10）


11


12

13

14

15

16

17

18

19

20

杯蓋(11、12)、杯身(13～20)

21

22

23

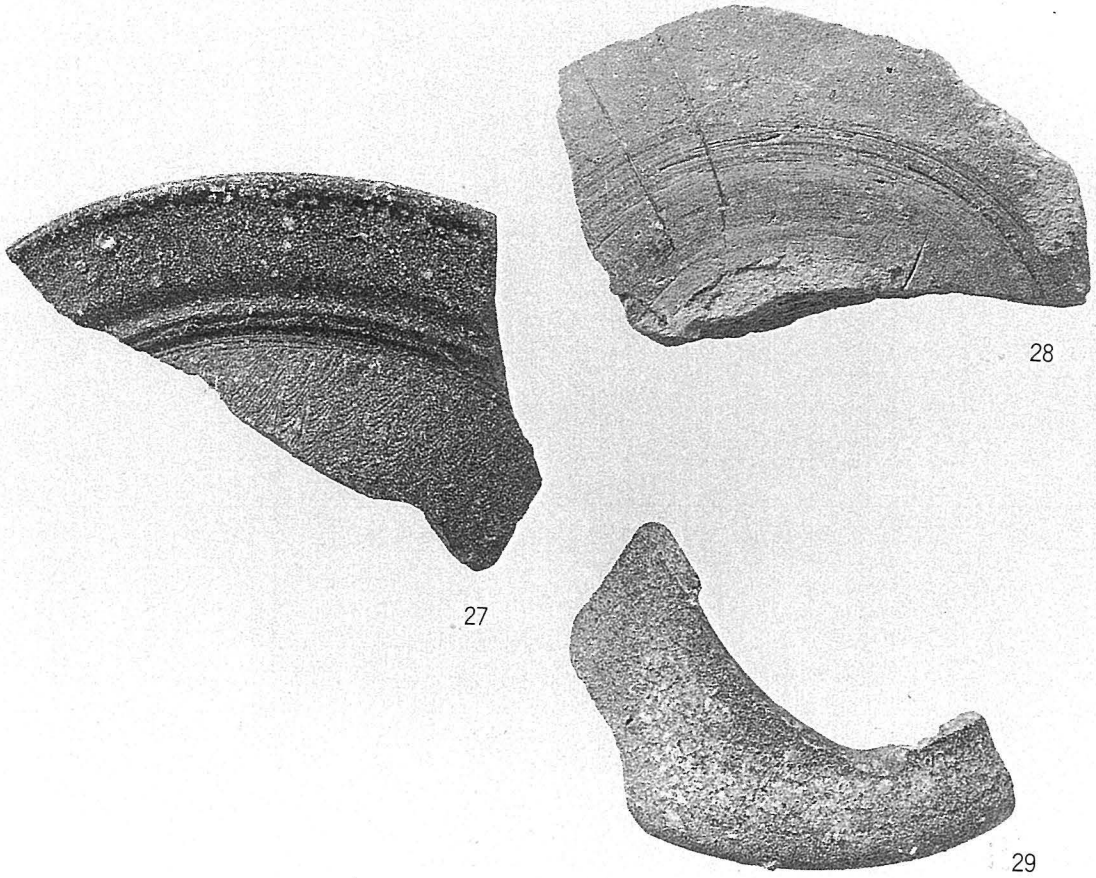
24

25

杯身(21～24)、器台(25)

26

a．甕



28

27

29

b．聰(27)、高杯(28、27)

大阪狭山市文化財報告書
山本一号窯発掘調査概要報告書

発行日　昭和63年３月31日発行
発　行　大阪狭山市教育委員会
印　刷　橋本印刷株式会社